

西川長夫の国民国家論と「移民」

崔 博憲

多くのものが押し流され奪い去られた後の「空虚」が、
未来の豊穡に転換する可能性は十分に考えられるであろう。
—西川長夫「多言語・多文化主義をアジアから問う」—

西川長夫の国民国家論

西川長夫は、自ら「最後の論集になる」と記した『植民地主義の時代を生きて』（平凡社、2013年）の「あとがき」で、「これまでの自分の文章の原動力は不正や理不尽なものに対する怒り」（581頁）だと述べている。西川にとって国民国家とは何よりも「不正や理不尽」を生み出す装置であった。だからこそ西川は全身全霊を賭けて国民国家に向き合い、それに関する膨大な文章を書き遺したのである。

国民国家の両義性を十二分に意識しながらも、それが世界において「差別の原理」になっていることを主張し続けた西川は、その主張の先に「自分自身の脱国民化、非国民化」という目標を明確に設定していた。わたしは、その点こそが西川の国民国家論の最大の特徴だと考えている。

国民国家論にはいろいろな立場がありえますが、私は究極的にはそのような差別の構造（植民地的—ポストコロニアル的）をいかに打破し、人類の新たな形式と原理とは何かを探究すべきものであると思っています。私がここでとくに強調したいのは、いまわれわれがめざす国民国家論とは、われわれ自身が心身ともにその一部と化している国民や国民国家を対象化し歴史的現象として分析考察し、それを乗り越える道を模索する試みであり、その試みは必然的に自分自身の脱国民化、非国民化に至るであろう、ということです。（「国民国家論から見た「戦後」」『国民国家論の射程』柏書房、1998年、260-61頁）

西川の国民国家論の起点となっていたのは、まずもって「われわれ自身」がどうしようもないほどに国民であり、その国民を問うことなしに、「自分自身の脱国民化、非国民化」はありえないという認識であった。

1997年だったと思う。西川の大学院ゼミで従軍慰安婦について議論されていたとき、西川がボソッと「従軍慰安婦となった人は確かに悲惨ですが、私は慰安所に列をつくっていた日本兵の方がもっと悲惨だと思います」と発言したことがある。

わたしは、西川長夫の国民国家論について考えようとするとき、その発言を必ず思い出す。

そのとき西川は「慰安所に列をつくった日本兵」に国民という存在の象徴を見出し、その日本兵と自分自身との間には絶対的な境界線などないと強く考えていたはずだ。

西川が国民国家を論じ、批判したのは、それが特定の人びとを差別し、抑圧し、他者化し、支配するからだけではなかった。西川が国民国家を論じ、批判したのは、それが特定の人びとを差別し、抑圧し、他者化し、支配することによってしかありえない国民という存在を生み出すからであった。西川にとって差別され、抑圧され、他者化され、支配される人びと以上に、そのようにしかありえない国民こそが悲惨な存在なのであった。

国民という存在のこうしたとらえ方は、エメ・セゼールの「植民地支配者」に対する認識と重なりあっている。「植民地主義の再発見」という文章のなかで、西川は「国民国家は植民地主義の再生産装置である」「国民国家の統治原理は植民地主義的である」と指摘したうえで、セゼールの次の言葉に繰り返し言及している（『植民地主義の時代を生きて』225頁、231頁）。

植民地化がいかに植民地支配者を非文明化し、痴呆化／野獣化し、その品性を墮落させ、もろもろの隠された本能を、貪欲を、暴力を、人種の憎悪を、倫理的二面性を呼び覚ますか、まずそのことから検討しなければならない。（砂野幸稔訳「植民地主義論」『帰郷ノート／植民地主義論』平凡社、1997年、125頁）

西川が問題化しようとした国民化とは、人間をこのような存在につくりかえてしまうことだった。西川はこのような存在を「怪物」と呼んだのであるが、西川の国民国家論とはその「怪物」を祓い除けようとした運動であり実践であった。

西川長夫にとっての戦争責任

「従軍慰安婦となった人は確かに悲惨ですが、私は慰安所に列をつくっていた日本兵の方がもっと悲惨だと思います」と言った西川は戦争責任や謝罪をどのように考えていたのだろうか。戦後50年という年に西川は戦争責任について「自分自身を日本共同体に同一化させずに、非国民をつらぬきながら責任を果たす（あるいは果たさない）わずかな可能性も残されている」（「1995年8月の幻影、あるいは「国民」という怪物について」『国民国家論の射程』、17頁）と述べている。

先にあげた西川の発言を聞いたときもそうであったが、戦争責任を「果たさない」という選択など決してありえないと考えるわたしは、この言葉にはじめて触れたとき強い反発を覚えた。それは今も消えていない。けれども、それ以降、西川の仕事に出会い直していくなかで、なぜそのように西川が言うのかを少しは理解するようになったと思う。

次の文章には戦争責任やそれに対する謝罪についての西川の考えが凝縮された形で示されている。

私は従軍慰安婦の問題を含めて、戦争責任や植民地支配の問題は「謝罪」で終わるべきではないと思います。心からの「謝罪」がまずなされるべきでしょう。しかし、私はありう

べき「謝罪」の文章を考えてみましたが、それが不可能であることに思い至りました。個人や集団の責任もあることはいうまでもありません。だが最終的に問われるべきなのは言葉ではなく、そうした事態（支配と抑圧、収奪と差別、暴力、等等）をもたらした国家の構造、さらにはそれを含む世界全体の構造であって、もし「謝罪」で終われば、結局はそうした事態を生み出した根底的な構造をそのまま放置・温存し、再び同様の時代を招くことになるでしょう。そしてそれはまさに現在の日本で起こっていることです。この問題のお手本とされるドイツの場合も、この点では大差ないと思います。また現在の国家構造すなわち国民国家体制とそれを保障するイデオロギーを維持するという点においては、東アジア諸国はむしろ共犯関係にあるのではないのでしょうか（これは私が長年、国民国家批判として述べてきたことです）。(『植民地主義の時代を生きて』, 99 頁)

植民地支配や戦争のみならず、それに対する責任を取ろうとする時さえも国民国家は人びとを国民へと回収することでその体制を維持・強化しており、またその構造は他国との共犯関係によってこそ成立している。西川はこうした世界のあり方そのものを打破しない限り、戦争と植民地主義は継続され、「自分自身の脱国民化・非国民化」はなしえないと考えたのだ。それは、世界全体の構造のなかで再生産され続けている国民こそが悲惨な存在だと考えていた西川からすれば、必然的に導き出された答えなのである。

ここで西川に対して「原理的過ぎる」といった批判をしても、それはほとんど批判とはならないだろう。なぜなら西川長夫という人間は、原理を追求したのだから。

ただし、わたしは、このような西川の考えや主張を分かった気になって、それを簡単に自分のものにしてはならないと思っている。それは、植民地支配や戦争の問題とその責任から自分を無関係な場所に置くことにつながりかねない。西川は、そのような場所がどこにもないことを知りながら言葉を発し続け「自分自身の脱国民化、非国民化」を模索したのである。

西川長夫の「移民」へのこだわり

国民という「怪物」を祓い除け、国民国家を乗り越えようとする西川にとって重要であったのが、「非国民」「私」といった位置、概念、コトバであった。国民国家はあらゆる回路を通じて人びとを回収し、国民化する。しかし、西川は人びとを国民化させるその回路を逆向きに辿り直すことによって、人びとは国民であることから脱し、「非国民」「私」という存在になりえると考えていた。

また、西川は既存の文化概念が静態的で国民国家のイデオロギーにまみれてはいるが、それは「文明とは異なり…個の内面にかかわる可能性を残している」(「補論」『増補 国境の越え方』平凡社, 2001 年, 397 頁)として、「交流し、融合し分離する動態的文化概念を担う「私文化」」(同, 436 頁)を提唱した。

「非国民」「私」「私文化」といった位置、概念、コトバとともに、あるいはそれらと関わらせながら、西川が既存の国民と国家、国民国家と世界との関係を揺り動かさうとする存在として考えていたのが「移民」であった。

西川が「移民」を意識したのは、自らの「思考と感性のほとんど原点ともいえる」（「植民地主義と引き揚げ者の問題」『植民地主義の時代を生きて』、220頁）引き揚げ体験が強く関係している。引き揚げ者が棄民、難民、帝国主義の尖兵といった複雑な立場性をもった存在であることを指摘しながら、西川は「引き揚げは植民地主義が生み出した難問である。植民地がある限り引き揚げ者の物語がある。引き揚げ者の引き揚げ後は終わったのだろうか。人類史上例を見ない人口の大移動を引き起こしたグローバル化時代には、新たな引き揚げ者たちが生まれているのではないだろうか。私にとって引き揚げ者の物語が終わらない以上、引き揚げ者の物語にこだわりたいと思う」（同、221頁）と述懐している。

「新たな引き揚げ者たち」とは現代の「移民」に他ならない。西川はグローバリゼーションが進むなかで生まれる「新たな引き揚げ者／移民」たちにこだわり、彼／彼女らによって紡がれる「物語」に次の時代を切り開く可能性を見出そうとした。

移動し越境する者へのこだわりは、国民国家に向き合うなかで一貫して示されている。1992年に書かれた「世界地図のイデオロギー」には次のような言葉がある。

戦争や災害や圧政や経済的困難、等々による大量の難民と移民の群れが国境を越えている。外国人労働者と呼ばれる貧しい越境者の群れを、われわれはどのように迎えたらいのであろうか。ローマ時代であれば蛮族の侵入とでもいったであろう。だがその蛮族が次の時代を作ったのだ（「世界地図のイデオロギー」『国境の超え方』筑摩書房、1992年、10頁）。

難民、移民、外国人労働者という国民非ざる者たちこそが、次の時代を作ると語る西川は、その後も越境者にこだわり続ける。

私が移民（ここでは難民や亡命者、移住労働者、等々を含めて広い意味で移民という言葉を使いたい）にこだわるのは、1つにはアメリカやヨーロッパやあるいは日本における移民研究の大部分が、移民を受け入れる受け入れ国（多くは宗主国）の、いわば国益の側からの研究であって、移民の側からの観点が弱く（マイノリティの権利を主張するキムリックでさえ、移民は自由意志であこがれの国にやって来たことになっている）、植民地主義やグローバリゼーションのもたらしたものについて無関心であることに苛立ちを感じてのことであるが、もう一つはそのようにして故郷を離れて移動を余儀なくされた人々の経験のなかに、次の時代の可能性が読み取れるからである。先住民の存在と彼らの主張が、大航海時代以来の西欧中心的世界史の書きかえを呼びかけるものであるとすれば、増大する移民の存在は、ポスト国民国家時代の人々の生き方に深い示唆を与えるものであると思う。二十一世紀の新しい人間関係や人間典型として「移民」を考えることができるだろう。（「グローバリゼーション・多文化主義・アイデンティティ」『増補 国境の超え方』、393頁）

越境者たちの身体や記憶、振る舞いには幾重にも困難や苦しみ、痛みの経験が刻み込まれていることを、自分自身引き揚げ者であり、またグローバリゼーションを新しい植民地主義の形態だとみなしている西川が忘れるはずはない。また、現代における「移民」の多くが、開発や

投機によって生存基盤を奪われたり新自由主義によって社会福祉が削減されたりした結果として移動を余儀なくされていること、「移民」となった人びとのほとんどが移動した先の社会のなかでは厳しい環境で働き暮らし、時に激しい差別を受けている現実も西川は熟知している。

だが、それでも西川は「移動を余儀なくされた人々の経験の中に、次の時代の可能性を読み取り、「増大する移民の存在は、ポスト国民国家時代の人々の生き方に深い示唆を与える」と語る。

では、西川は「ポスト国民国家時代」という時代をどのように思い描いていたのだろうか。上の文章とほぼ同時期に書かれた文章で西川は次のように述べている。

「移民」の側から、あるいは移民を送り出す側から世界を見たら何が見えてくるのか。これまでの社会科学は定住社会を前提としてきたと思います。主権も国籍も文化も、あらゆる概念が、定住を前提として成り立っている。だが世界は国際移動の時代に入っている。移住社会という前提から見たら何が見えてくるか。移住社会において主権や国籍や文化はどのように定義されるのでしょうか。(「フランスの解体」『植民地主義の時代を生きて』、66-67頁)

「主権」「国籍」「文化」とは、国民国家を国民国家たらしめてきたもっとも重要な装置、制度、イデオロギーである。国民国家が人間の群れを国民という名の下に囲い込むためにそれらは不可欠なのである。しかし、「移民」は、国民が前提としている人間のあり方からどうしてもなくこぼれ落ち、はずれ、はみ出る存在である。そのような人間の増大は、「主権」「国籍」「文化」といったものの正当性を問い直し、国民国家が人びとに押しつけてきた物語の虚偽性をハッキリと暴くことになる。

そのような「移民」の可能性に、「左翼的エピキュリアン」として西川長夫は未来を賭けたのではないだろうか。

戦後日本と「移民」

西川が最後に編んだ『戦後史再考』(平凡社、2014年)は、戦後日本を「考えなおすこと」、あるいはその時代の「誤り／過ちを正すこと」という西川の意図を出発点とする書となっている。当初、その大部を西川が書き下ろす予定であったのだが、西川の病が悪化したことで西川と関係のあった13人の人間がそれぞれ自分なりに意図を引き継ぎ、最終的にはそれぞれが戦後史の再考を試みるという形でまとめられた(この点については『戦後史再考』の「はじめに」で詳しく説明されているのでそちらを参照していただきたい)。

13人の1人として『戦後史再考』に書く機会を与えられたわたしは、主に在日韓国朝鮮人と外国人労働者に焦点をあて、戦後日本の外縁を生きてきた／いる人びとについて論じた。

多文化や多民族を積極的に謳っていた戦前・戦中から一転して同質性の高さを強調するようになった戦後日本で外国人のほとんどを占めていたのは、被植民者であり日本帝国の臣民であった韓国朝鮮人たちであった。彼／彼女たちは戦後日本のなかでも「内なる他者」として政治的・経済的に周縁化され続けており、いまネット空間や街中には彼／彼女らに対する罵詈雑言が溢

れている。

長らく戦後日本を生きてきた在日韓国朝鮮人だけではない。グローバル化が進む今日、新たに日本で働き暮らしはじめている多様な外国人もまたさまざまな形で周縁化されている。それは外国人労働者と呼ばれる人びとに対して顕著である。現代日本の労働とりわけ底辺労働は彼／彼女らがいなければもはや成り立たない。それほどまでに彼／彼女らに依存しているにもかかわらず、日本政府は、いまま外国人の「単純労働者」や移民は国内に存在せず、これからも受け入れないと喧伝し続け、「非移民国家」という偽りのアイデンティティをなんとか守ろうとしている。そのような実態にそぐわない対応によって、多くの外国人労働者が周縁化され続けている。

現在、実態との乖離を取り繕う姿勢をもっとも象徴しているのは「外国人技能実習制度」である。それは、国際貢献を掲げ、途上国への技術・技能の伝達を謳っている制度であるのだが、実質的には国内労働者が働きたがらない条件の厳しい労働現場が国外からの安価な労働力を調達する仕組みとなっている。

2014年4月4日に行われた「経済財政諮問会議及び経済財政諮問会議・産業競争力会議合同会議」での安倍首相の発言である。

…優秀な人材の受け入れや留学生などの外国人材の積極的な活用に取り組む必要があります。

谷垣法務大臣を中心に、関係閣僚の協力の下で、技能実習制度の監理・運用体制を抜本的に強化・改善するとともに、実習期間や対象業種などについて必要な見直しを行っていただきたいと思います。

特に、オリンピックに向けて、当面の建設人材不足を補うために、外国人建設技能者の活用が必要であります。本日の閣僚会議の決定に基づき、関係閣僚には新たな制度の具体化をお願いいたします。

本日の議論を踏まえ、移民政策と誤解されないように配慮しつつ、女性の活躍推進や中長期的な経済成長の観点から、十分な監理体制の下での更なる外国人材の活用の仕組みについても、検討を進めていただきたいと思います。その際、国家戦略特区の活用も含めて検討をしていただきたいと思います。

「オリンピック」のため、「女性の活躍推進」のため、「経済成長」のため、外国人の労働力をこれまで以上に柔軟かつ積極的に「十分な監理体制の下で」「活用」するが、彼／彼女たちはあくまでも「外国人材」であって移民ではないというわけだ。

ただし、こうした日本の対応や政策は特定の首相あるいは内閣だけに限らない。それは、戦後日本がとってきた非日本人に対する向き合い方を新たに再編して継続しているに過ぎない。

早晚、日本は公的にも移民を受け入れることになるだろう。それは不可避だ。だが、現行の展開が、根本から改められないかぎり、その移民の受け入れは公的に二級国民を生み出すことになる。

さまざまな理由から移動を余儀なくされた人びとは、西川がいう「移民」である。そして「移民」である限り、彼／彼女らは厳しく苦しい環境に置かれ続ける。新たな多文化、多民族、多

国籍状況は越境者たちの「自由意思」によって起きている現象ではない。それは、資本と国家の関係の組み替えによって起きている現象である。それゆえ、そこには差別や抑圧、収奪、暴力、分断があり、そしてそれに伴う苦しみや痛み、哀しみがある。

だが、それでも「移民」の側から、あるいは移民を送り出す側から世界を見たら何が見えてくるのか」と言っただけの時代の可能性を「移民」に見ようとした西川と同じように、新しい時代をつくるのは既存のシステム・体制のなかでそれを当たり前として生きてきて、これからもそれを守ろうとする者たちではないと考えるわたしは、『戦後史再考』に寄せた文章の結語で次のように述べた。

戦後日本では、移動や移住はもっぱら「彼ら」の経験や実践としてとらえられ、それと「われわれ」がかつて入植者、兵士、引揚者、移民、集団就職者、出稼ぎ労働者、流民であった歴史を結びつける想像力は徹底的に手放されてきました。「移民」の側から世界を見ることは、そのように自他を分断してきた歴史を再考し、「われわれ」が「われわれ」であり「彼ら」が「彼ら」である根拠となっている「主権」「国籍」「文化」を根底から問い直す契機となるはずです。その途の先に「新しい歴史的時代」(ベンヤミン)が創出され、その時代にふさわしい新しい世界地図を描くわたしたちが生まれるのではないのでしょうか(「戦後史の外縁一次の時代は誰がつくるのか」『戦後史再考』, 287頁)

灯台にあかりを灯した西川長夫

文章を脱稿後、それを読んでいただいた人から以下の感想をEメールで受け取った。

いただいた原稿をプリントアウトして読みました。

非常に共感するところがあります。

その上で、私が西川さんに対して感じていた違和感を、本論文に対しても覚えるので、率直に書いてみます。

<「移民」の側から見たら、戦後世界も民主も歴史も。。。大きく様変わりして見えてくる。これまでの社会科学は定住社会を前提にものごとを考えてきたが、そうではないのだ。> こうした西川さんの考え方は、たとえば1848年革命をスラブの被抑圧少数民族の視点から見たらどうだったのかを問うた良知力さんの仕事や、伊豫谷登士翁さんの『移動という経験』などにも連結していて、とても大事な観点だと思います。

ただ、問題は突破の方向です。

「移民になる、非国民になる、コスモポリタンになる。。。」といった言い方が結びの言葉になることに対して、私には違和感があるのです。

1. そういう方向を自ら選び取ることができるのは、いろんな意味で力と考えのある人の場合でしかないのでは。
2. 理念を示す灯台としてはわかりやすいが、そうなることを具体的に示す道筋がないと理念以上ではないだろう。

…

勝手なことを書いてしまいました。

引き続き、議論していきましょう。

教育者、研究者でもあると同時に日本の植民地支配と戦争責任によって生み出された問題に取り組む、帝国日本によって被害を被った人びとと直接的に向き合い続けてきた人である。その人が取り組み、向き合っている現場では、いまでも「心からの「謝罪」」が問われ続けている。引用したわたしの文章や西川への感想は、そうした現場から発せられている。

だが、わたしは、繰り返しこの応答を読み返しながらか、改めて考え抜いた人であった西川長夫はその責任を全うし、灯台にあかりを灯したことを確認した。

残されたわたしたちは、西川長夫が灯した灯台のあかりによって照らされた可能性と課題にそれぞれの具体的な現場で向き合い続けるほかない。